
タイムリミット

Dragon-me

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイムリミット

【Nコード】

N7229Y

【作者名】

Dragon-me

【あらすじ】

とある中学校の戦闘実験は、奇跡的に誰一人被害者を出さずにプログラムを終了した。その中学の、二人の生徒の話。

腕時計の分針が、また一つ動いた。場内の放送が入る。

俺達の『六十番』は開始から誰一人被害者を出さず、間もなく24時間のタイムリミットを迎えようとしている。それは奇跡ではない。俺達の絆の、決して壊れる事のない証だ。

プログラムが始まった時、俺達は全員で一緒に死ぬ道を選んだ。それは、開始直前のアイツの言葉からだ。

『みんな！ 約束しようっ！ 絶対に殺し合いしないって……』

……命知らずのバカが。そんな事言うから、真っ先に殺されるんだろうが……。

そんな事を脳裏で呟き、ため息をつき、たった一人しかない路地裏の端に座り込み腕時計を見つめる。時刻は9時55分。

タイムリミットまであと5分。

怖い。迫り来る一瞬の激しい痛み。身体が切断されるという恐怖。だったらいつその事進入禁止エリアに飛び込んで自分のタイミングで死んだ方がましかとも思ったが、全員が同じ時に死ななければならぬんだ、じゃないとアイツが死んだ意味がない。

もちろん、誰かを殺せばその恐怖からは解放される。しかしそうすると、それよりも果てしなく大きい恐怖……それはいつ殺されるか分からない状況かも知れないしクラスを裏切ったという罪なのか

も知れない……が一気に襲ってくる気がして、俺はその行動に移る事など出来ようもなかった。

そもそも、支給武器のライフルはもうこの手にもバッグにも無い。俺は人殺しをしないと誓って場外に武器を放り込んだんだ。他にもたくさん殺傷のためだけに作られた武器が放り出されていた。

故に、俺は立派にリミットで散る義務がある。政府への反逆？
そんななんでもいい。

また、分針が一つ動く。

その時、誰かが近づく気配がした。一瞬身構えたが、ソイツが真っ先に武器を捨てたヤツだと分かった瞬間に安堵した。

ソイツは俺の名前を呼ぶと、おもむろに俺の方に近付いて来た。もし俺が裏切り者だったら危ねえのにな。とかいう俺もまたソイツがまたどこかで武器を入手するとすりゃ危ねえけど。

ソイツは俺の横に座った。そして、俺はソイツの第一声に少し驚いた。

「良かった……まだ生きていた人、いたんだ」

まだ生きてた？ という事はソイツがここに来るまでの最中、何人かの死体『しか』見て来なかったのか？

俺は敢えて突っ込んで聞きはしなかった。が、多少の苛立たしさを覚えた。それを表に出しても何の得も無いのは承知していたので、

「何だよ。俺が死んでるとでも思ったか？」

と、取り繕った笑みを浮かべて返事した。

「ううん。あんたなら絶対生きてるって信じてた」

俺の目をしっかり見て、嬉しいのか悲しいのか分からない笑みでソイツは言った。吸い込まれるようにソイツの目を見ると、もうすでに真っ赤である事に気が付く。恐らく、ソイツの友人達もリミットが来る前に自ら命を絶ったのだろう。

果たしてそれは悲しみか怒りか。

また、分針が一つ動く。場内放送が3分前である事を告げ、殺し合いを催促する。

「私達も、もうすぐだね」

黙って頷く。ソイツの顔は少し寂しそうではあったが、それ程でもないようにも思えた。

「今まで色々あったね」

「まあね……死ぬ実感が全然ねえよ」

不思議な事だ。まだ、ほぼ15年しか生きてないのに死ぬなんてな。

しかもそれを知ったのは昨日なんだよな。突然言い渡されたんだから、不思議であると言える訳だ。

「そうだね。なんか……ね」

ソイツは笑った。でも、泣いていた。

それしきり、沈黙が流れた。

また、分針が一つ動く。

ソイツは沈黙を破り、最初はすすり泣きだったのが今では声を上げて泣いている。俺は、その様子を見つめる他出来ない。そうだと決め付けたのが過去の俺だった。

が……ソイツを慰める事が出来るのは俺しかない。今の俺はそれに気が付いた。

やはり異性の体に触れるのはまだ抵抗がある。けれども、そうでもしなければ何も伝わらないと直感で感じ取った。

俺はソイツの頭に優しく手を置いた。

「えっ……?」

ボロボロになった顔を上げ俺に見せ、戸惑うソイツ。俺はソイツの目を真っ直ぐ、強く捉えて言った。

「平気だって。あと少しで、俺達は地獄から解放される。それまで辛抱しろ」

我ながら全く柄にもない台詞。ただ、それを恥ずかしく思う余裕

は無い。

これが、今言える俺の精一杯の優しさなのかな。

その時、俺は一体何が起こったか分からなかった。あまりに突然の事だった。

「……ありがとう」

その掠れた小さな声が耳元で聞こえた時、俺はソイツに抱き付かれたんだと悟った。

また、分針が一つ動く。場内放送など、俺の耳には一切届かなかった。

不思議だ。ソイツと一緒にいると、死が怖くない。一体何故なんだろう。俺はソイツと前から特別何かあったという訳でもないのに。

死ぬという実感は相変わらず無い。ただ、ソイツと一緒にプログラムのタイムリミットで散れる事が誇りに思えた。

俺達は、アイツとの約束を果たす事が出来る。

全身を感じる、忘れかけていた人間の優しい温もり。俺は無意識にソイツを抱き寄せていた。

もっと強く。もっと優しく。何も言わなくても、お互いの心は十分伝わる。

分針が12を指す。

今、行くよ……。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7229y/>

タイムリミット

2011年11月21日18時07分発行